九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アリストテレスの自足性について

奥，貞二

https://doi.org/10.15017/1398583

出版情報：哲学論文集. 28, pp.39-54, 1992-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

アリストテレスの自足性について

奥　貞二

序

アリストテレスの著作の中で、「自足性」(*αὐτάρκεια* : self-sufficiency) という言葉は、とても重要と思える箇所に、殆どキーワードのように使われているにも関わらず、未だ全体を見通した論点が提出されてないように思われる。[1] 小論では、「自足性」という言葉の、本来の場面でのその内実を明らかにする事である。加えて、この言葉が持つ射程距離というか、この言葉に込めた構想を推論する事である。

一章　「自足性」という言葉

自足性という言葉は、アリストテレスでは、『ニコマコス倫理学』(Ethica Nicomachea 以下=E.N.と書く)と、「政治学」

(Politica以下→Pol.と書く)の二作品で、主に使われている。[2] 極めて慎重な扱いが要求されるが、E.N.1 ch.7では、次のように、「自足性」という言葉が、定義される。

「自足するもの」とは、「それだけをとってみても生活を望ましいもの、何ら不足するところのないものにするもの」と定義する(*τὸ δ' αὔταρκες τίθεμεν ὃ μονούμενον αἱρετὸν ποιεῖ τὸν βίον καὶ μηδενὸς ἐνδεᾶ*)。[3]

この意味は、徹底的に究明されるべきものとして前に置かれているのではあるが、どのように理解すればよいのであろうか。「それだけをとってみても生活を望ましいものにする」の意味であるが、これは他のものの故にではなく、それ自身の故に望ましいものにしているということ、具体的には、その人の持つ財産のような外的なものでなく、その人自身が身につけている器量(徳)のようなものを考えることが出来るであろう。更に又、「自足」という事が、もし不足するところの何もない自分一人で満ち足りているという事であるならば、あのアリストテレスの有名な〈人間はポリス的動物である〉[4]という言葉は、どう理解すれば良いのだろうか。社会的動物として、共同体的生活をするということであって、[5] 自分一人において足りているということは不可能である。仲間と共に助け合ってしか生きていけない。

もしそうだとすれば、「自足」の状況と、対立するようにも思えるのだが、どのように解釈すればよいのだろうか。

ところで、「弁論術」(Rhetorica 以下→Rhet.と書く)において、次のような興味深い主張をするのである。

「従って、もし幸福がこのようなもの(徳と結びついた善行、生活の自足(*αὐτάρκεια ζωῆς*)、安全と結びついた最も楽しい生活、財産や奴隷を保護し且つ利用する力と結びついたこれらのものどもの豊富さ)であるなら、それの部分は生まれの善さ、友人の多さ、友人の善さ、富、善い子持ち、子だくさん、老いの善さ、更に身体の徳、善い評判、名誉、好運、徳などでなくてはならない。何故なら、こうして、つまり自分自身の内にある善いものども(*τά τ' ἐν αὐτῷ ἀγαθά*)と、外にある善いものども(*τὰ ἐκτὸς ἀγαθά*)とが彼に備わっているなら、A 最も自足的であるだろうから(*οὕτω γὰρ ἂν αὐταρκέστατος εἴη*)。と言うのは、以上のものども以外に善いものどもは別にありはしないからである。しかし自分自身の内にあるのは、

魂に関する善いものどもと、身体の内にある善いものどもで(ἐν αὐτῷ μὲν τὰ περὶ ψυχὴν καὶ τὰ ἐν σώματι)、外にあるのは生まれの善さや、友人や、財産や名誉である(ἔξω δὲ εὐγένεια καὶ φίλοι καὶ χρήματα καὶ τιμή)。[6]」

以上、E.N.と Rhet.の引用から、アリストテレスの「自足性」について、次の二つの事が確認される。

(1) 自分自身の内にある善いものども(魂に関する善いものと、身体に関する善いもの)と、自分自身の外にある善いものども(生まれの善さ、友人、財産、名誉)の両方のものが備わらなければ自足性は成立しない。

(2) 傍線部 A の論点は重要である。「自足性」という言葉は、形容詞の最上級で書かれている事である。つまり「自足性」という言葉は、比較されうるものとして、様々な段階に用いることが出来る。最低限しか満たしていない、あるいは必要条件しか満たしていない意味の「自足性」や、いわば、完全な、必要且つ十分な、全てを満した「自足性」を考えることができる。換言すれば、動物レベルの「自足性」、人間レベルの「自足性」、神の生活というものを考える事が出来るとすれば、神レベルの「自足性」と言ったものを想定できるという事である。これは、以下の考察に重要な示唆を与えるであろう。

E.N.1で問われていたのは、「最高善・人間の善」である。[7] そして、「終極性」(τέλειον)による目的概念の三種類が検討された。一・ 富や笛など、また道具となるもの・・・他のものの故に追求されるもの 二・ 名誉や快楽や理性や徳・・・そのもの自体の故に選ぶと共に他のものの故に選ばれもする 三・ 幸福・・・そのもの自体の故に選ばれ、決して他のものの故には選ばれることがない。

他のものの故に選ばれることが決してなく、そのもの自体の故に選ばれるものの例として、初めて〈幸福〉という言葉が、E.N.に登場したことが重要である。それ自体の故に選ばれるものとの連関から、これまた初めて〈自足性〉という言葉が登場したのである。そして、「自足性」という観点が導入され、上述したように定義した上で、幸福は、自足的で終極的なもの

であるとされるのである。そして、人間の活動の考察から、人間の善（幸福）は、徳に即しての魂の活動とされたのである。この規定にしたがって、以下徳についての各論が、展開されるのである（E.N.1 ch.13〜6 ch.13）。そして、抑制と無抑制について（E.N.7 ch.1〜10）。快について（E.N.7 ch.11〜18）。愛について（E.N.8 ch.1〜9 ch.8）。再び快について（E.N.10 ch.1〜5）、そして、幸福について再考される（E.N.10 ch.6〜9）のである。

二章A　E.N.10 ch.7 で語られる「自足性」…〈神的〉自足性

アリストテレスの幸福は、終極的な（τέλειον）、自足的なもの（αὔταρκες）であることが規定され、徳に即しての魂の活動、魂の中でも最高の部分の活動とされた。さてE.N.10 ch.7では次のように語られるのである。

「また、いわゆる「自足」ということも、他の何よりも観想活動について言われうることであろう（ἥ τε λεγομένη αὐτάρκεια περὶ τὴν θεωρητικὴν μάλιστ᾽ ἂν εἴη）[8]。・・・」

「さらにまた、観想活動は単独にそのものだけで、そのもの自体の故に愛好されると考えられよう（δόξαι τ᾽ ἂν αὐτὴ μόνη δι᾽ αὑτὴν ἀγαπᾶσθαι.）。なぜなら、観想活動からは観想すること以外の何も生まれないが、実践活動からは行為以外に多かれ少なかれ何か得るところがあるからである（οὐδὲν γὰρ ἀπ᾽ αὐτῆς γίνεται παρὰ τὸ θεωρῆσαι, ἀπὸ δὲ τῶν πρακτικῶν ἢ πλεῖον ἢ ἔλαττον περιποιούμεθα παρὰ τὴν πρᾶξιν.）[9]。・・・」

「・・・これに対し、理性の活動はその専心において他を抜きんで、そのもの自体以外の他の如何なる目的にも向かわず、また、快楽をそのもの自体の内に備えていると考えられるならば（この快楽は活動に加わり、活動を強める）、また、人間に許される限りでの自足と余裕と無窮、即ち何であれ、幸いな人に帰せられる限りの全ての特徴がこの活動によって生まれてくるのは明らかであるとすれば、これに人生の充全な時期が加わるとき（なぜなら、幸福な生に備わるものは何一つ不完全

ではないから)、これこそ人間の持ちうる完全な幸福であろう。[10]」

「こうして、理性が人間に比して神的なものであるとすれば、理性に従った生活も人間的な生活に比して神的な生活であることになるだろう(*εἰ δὴ θεῖον ὁ νοῦς πρὸς τὸν ἄνθρωπον, καὶ ὁ κατὰ τοῦτον βίος θεῖος πρὸς τὸν ἀνθρώπινον βίον.*)。[11]」

このE.N.10で語られる「自足性」の中の論点は、二つある。[12] 一つは、魂の最善の部分での活動(理性の活動)が、観想とされた事である。実践的な諸活動からは、行為そのもの以外に多かれ少なかれ、何か得るところがあるし、しかも必ずと言っていいほど、相手を必要としているのである。それに対し、観想は、活動それ自身以外の何物も生じないと共に、他の如何なるもの(例えば、相手)も必要とはしていないのである。この点からも、観想活動は、最も自足的活動であるという結論が導かれたと考えることが可能であろう。

二つめは、アリストテレスが考えた、幸福とは、観想活動に他ならないことが結論されるのであるが、この活動はいわば、人間的活動を越えて、神的活動、神が行う行為である。そして、人間がもし関わることが可能だとすれば、理性に即しての活動ということになる。従って、かかる観想活動による自足性は、〈神的〉自足性と言葉の正しき意味で呼ぶことが許されよう。

二章B　Pol.1 ch.2 で語られる「自足性」…〈自然的な〉自足性

全く違った視点から観てみよう。プラトンは、「国家篇」(Respublica 以下→Res.と書く)の中で、次のように述べている。

「それでは君は、人間の性格の種類もまた、ちょうど国制の種類の数だけなければならないということは知っているね。それとも君は、国制というものは、どこか樫の木か岩からでも生まれて来るものだとでも思うかね。いや、それぞれの国に

住む人間たちの性格に基づいてこそ、国制というものは生じて来る。[13]」

Res.を読むものにとって、国制と、そこに住む個人の性格が対応しているという前提にたって、全篇が描かれているのが一目瞭然である（いわゆる、大文字小文字論）。[14] 即ち、Res.においては、そもそも正義とは何かの考察から、必要最小限の国家、理想国家、そして、国制の変遷と述べられてきたのである。一貫して、国と人との対応がみられたのであり、とりわけ、Res. 8〜9巻における国制の変遷（不完全国家とそれに対応する人間の諸形態）の中で見事に描かれていたのである。個人の魂のあり方と、国制のあり方が、無関係の二つの独立した原理で描かれているのではなく、両者密接に関係し、類比関係にある。いわば、そこでは、倫理学と政治学というように区別される事なく、一冊の本に纏められていたのである。ところで、E.N.においては、その文頭から倫理学は、政治術の一部であり、倫理学と、政治学が、共に実践学を構成する要素であると考えられた。しかし、これらが共に、実践学という学問分類における共通性を有するのではあるが、更に一歩踏み込んで、共通の土俵で語りうる言葉が存在しているのではないか、という疑問が涌くのである。この問いに対する解答については、殆ど答えられていないのが実状である。そこで、次のように仮定し検討するものである。

仮説：アリストテレスにおいては、「自足性」という言葉が、中心概念・キーワードとしてあり、倫理学と政治学共にこの言葉が、中心的な意味を担って用いられている。

前章において、E.N.での「自足性」という言葉の用法、意味が検討されたとしよう。今度は Pol.という作品の検討に移ろう。アリストテレスは、Pol.1 ch.2において、国家について、次のような興味深い話を説くのである。

「[B]そして村落が二つ以上集まって出来る最終の共同体、すなわち共同体として完成したものが国家（ポリス）なのである。それはいってみればあらゆる自足の条件を極限的にみたしているのであって、その生成理由はわれわれが生存するための必

要によるものであった(*τοῦ ζῆν ἕνεκεν*)が、今やそれの存在理由はわれわれの生活を良くすることにある(*τοῦ εὖ ζῆν*)のである。このゆえに国家はすべて自然の産物なのであって(*πᾶσα πόλις φύσει ἐστίν*)、これはそれに至る最初の公共体(家族や村落)がすでに自然によって生じたものであるとすれば、そういう結論になるはずなのである。というのは、国家はかの共同体の最終目的であり、ものの自然の本性は最終目的となるものにあるからだ(*τέλος γὰρ αὕτη ἐκείνων, ἡ δὲ φύσις τέλος ἐστίν.*)。すなわちそれぞれの事物の自然の本性ということをわれわれがいう場合には、それぞれの事物が生成を完了したときに、どのようなものとしてあるか言うのだからである。これはまさに人間の場合も馬の場合も家の場合もそうなのである。さらにまた、ものがそのためにあるところのもの、すなわちそれの最終目的となっているものは、究極的な善ということになる。自足性というものは、共同体にとっての一つの目的であり、善として究極的に求められているものなのである(*ἡ δ' αὐτάρκεια τέλος καὶ βέλτιστον.*)(そしてそれは国家において実現されるのである)。

かくて以上によって見れば、国家が(まったくの人為ではなくて)自然にもとづく存在の一つであること(*τῶν φύσει ἡ πόλις ἐστί.*)は明らかである。また人間がその自然の本性において国家を持つ(ポリス的)動物であること(*ὁ ἄνθρωπος φύσει πολιτικὸν ζῷον.*)も明らかである。そして国家を持たないものがあるとすれば、もしそれが偶然によるのではなくて、生まれつき自然にそうなのだとしたら、それは人間として劣性のものであるか、あるいは人間以上の何ものかである。[15]」

傍線　B　について

先ず国家が、完全な共同体(*κοινωνία τέλειος*)であるという意味で、自足的であることが確認された。そして、次に二種類の自足性を認めている。その一つは、必然的自足性：最低限の生活、生きるに必要な限りの自足性とでも言うべきものである。他方は、よく生きるための自足性：もちろん前者の自足性が満たされる上で、充全にコントロールでき、秩序を保てるに必要な自足性である。[16]

「国家は、自然である」の論証について

アリストテレスは、Pol.1 ch.2 において、国家が自然であるという事を論証して見せている。その論証の過程で、国家は自然であると同時に、自足的であることが証明されるのである。ところで、ギリシャの伝統的な取分けソフィストのノモス・ピュシスの分類によれば、[17] 人為的な国家は、当然ノモスの側に分類されるべきものである。にもかかわらず、アリストテレスはどの様な意味を込めて、国家を自然としたのであろうか。

「国家は自然である」とした論証[18]は、次の二つある。一つは、国家の起源に言及するのであるが、先ず男と女はカップルになること（*συνδυάζεσθαι*）が自然である。支配者と、被支配者が生まれ、続いて家が、そして、村が形成されることが自然である。村から国家が形成される。生成の終極を、そのものの自然と呼ぶ。人間の中で、男と女がカップルになるのが自然であることが言えれば、（もちろん、何にもまして、男と女がカップルになることは自然なことであるから）それと同じ意味において、国家が自然であると言える。[19] 二つめは、「自然は何一つとして、無駄には作りはしない」[20]という、アリストテレスの目的論的自然観によれば、終極目的は最善である。国が目指す自足は、終極目的であり、それ故最善である。ところで自然は最善のものを目指すことを目的としているから、最善のものを目指す国家は自然である。

この自然観によれば、国家は、自然であり且つ自足という等号によって結ばれることになる。（国家＝自足＝自然）

自足の第二番目の新しい場面として、国家は自然であり、その国家が自足的である。つまりは、〈自然〉という意味の自足を認めることが出来る。

二章C　E.N.8～9における自足性 …〈人間的な〉自足性

前章において、国家は、自然においてあるものであり、自然は終極目的であり、最善である。しかも自足こそが、終極目的で、最善であるという結論が得られた。つまり、自足という言葉によって、政治学と倫理学とが共通の土俵に乗せられた

と共に、ここでの自足が、自然という性格を持つことが確かめられた。E.N.1での幸福論は、本格的に展開されてなく、しかも、E.N.10におけるそれは、神的生活における幸福論とすれば、我々は、アリストテレスの「自足性」の最も言いたい点を、何処に見いだせばよいのだろうか。逐一「自足性」の箇所を検討した結果、幸いにも、倫理学書の中に、極めて興味深い二つの論点を認めることが出来る。先ず一方は、友愛・フィリア論の中で、友の必要性を述べた箇所であり、他方は、E.N.4 ch. 3の、高邁について述べた箇所である。

前者の友愛・フィリア論の方はどうであろうか。周知の通り、アリストテレスは、友愛論を展開するに当たって、先ず、愛されうる対象（φιλητόν）から考察を始めている。それには、三つあり、一つ目は、善きもの（ἀγαθόν）。二つ目は、快きもの（ἡδύ）。三つ目は、有用なもの（χρήσιμον）である。更に友愛成立の条件として、お互いに好意を抱いている事。相手方にとって諸々の善を願っている事。更に、以上の事が、各々相手方に知られている事の三つを上げている。それ故、若者にあっては、快をもたらしてくれる人が、友となることが多く、老人にあっては、正に実利を追求するが故に、自分に有利さをもたらす人を友とするのである。これら何れも、愛する相手の「人となり」の故にではなく、かえって相手が、有用であり、快適である限りにおいて愛しているのであり、快や有用さがもたらされなくなると、これらの友愛は、解消される。それに対し、善き人々の間の、究極的な性質の愛は、付帯的なものに即しての愛ではない。相手方の人々それ自身の故に、愛しているのであり、長続きし、解消することはないとされる。[21] これら三種類の愛を軸に、友愛論は、以下展開される。[22]

そして、自足・自足している人の場面については、次のように語られる。

「さて以上に関連して、自足と自足する人について、次のことを述べるべきであろう。

自足する人は親愛をも必要とするであろうか、それとも必要とせず、このことに関しても彼は自分自身に関して自足しているであろうか。詩人たちでさえ、次のようなことを言うのだから。

『神様が良くして下さるとき、何で友が入りましょう。』

ここから次の疑問も生ずる。あらゆる善きものどもを有し且つ自足しているところの人は、親友をも必要とするであろうか。或はこの場合には、彼はもっとも多い程度にさえもそれを必要とするであろうか。つまり彼は、誰に善くするのであろうか。或は誰と一緒に生活をともにするのであろうか。彼一人では、とにかく生活していかないだろうからである。[23]・・・・」

「神があらゆる善を有し且つ自足している以上、神は何を行うであろうか。けだし神は眠らないであろう。それでは何かを観想するであろう。[24]・・・・・」

「しかし、神が事実何を観想するであろうか、などと言うことは捨てておいてよい。神の自足について我々は考察を行うのではなく、人間の自足について考察を行うのであって、自足する人が、親愛を必要とするであろうかなのである。ところで、誰かが彼の親友に目を注いで、その親友が如何なるものであるか、また如何なる性質であるかを知るならば、かかる者は第二の自己といったものであろう。少なくとも、君が大の親友を思うならば。「彼は他のヘラクレス」の諺のごとく、親友は他の自己である。賢者の或もの達も言っているように、自分自身を知ることは最もむずかしいことであるとともに、また最も快いことである。[25]・・・・」

「我々が自分自身を知ろうと欲する時にも、我々は親友を観て、これを知りうるであろう。というのは、我々が言うように、親友は第二の自己だからである。そうである以上、もしも自分自身を知っていることが快いことであり、またこれを知っていることが、他の親友なしには不可能であるとすれば、自足する人自身が自分自身を知るためには、親友を必要とするだろう。[26]・・・・」

「共に生活することは、快くあり、また必要なことであるからである。それ故に、もし右のことが美しくあり快くあり且つ必要なことであり、またこのことが親愛なくしてはありえないとするならば、自足する人は親愛をも必要とするであろう。[27]」

先ず議論が、「自らの外においても、内においても何不自由することなく現に自足している人が、更に友を必要としている

か否か」という形で議論が進められていることである。つまり、ここでの議論の展開は、自足とは何かという形では展開していないことである。その確認の上で論点を拾うと、

「自分自身を知ること」このことが、人間にとっての唯一最大の課題であり、それには、例え十全に自足している人であっても、友を必要とする。何故なら、「自分自身を知ること」は、友を観て知ることが可能であり、それ以外不可能であるからである。また、「共に生活すること」が、美しく、快く、且つ必要な行為である。これまた親友なくして「共に生活すること」もあり得ない。とすれば、例え自足する人であっても、「自分自身を知ること」も「共に生活すること」も友なしには不可能であろう。

第二の具体例としては、E.N.4 ch.3 で展開される高邁についてである。

自足生が、仮に充足されている場面であっても、必ず友を必要としている。これを今認めたとしても、具体的な〈人間的〉自足性とは、一体如何なるものなのだろうか。アリストテレスは、高邁な人という独特の考えの中に、その具体的人間像を明らかにしているのである。

「こうして、高邁（*μεγαλοψυχία*）は諸々の器量の、いわば、飾りのようなものである。即ち、それは器量を一層偉大なものにするが、しかも、それは器量をまたずには生まれないのである。この故に、人が本当の意味で高邁な人であるのは難しいことである。それは完全な徳を待たずにはありえないからである（*διὰ τοῦτο χαλεπὸν τῇ ἀληθείᾳ μεγαλόψυχον εἶναι. οὐ γὰρ οἷόν τε ἄνευ καλοκαγαθίας.*）[28]。」

「また、彼は収益のある、利益のあるものを所有するよりは、美しくて収益のないものを所有する性質の人である（*καὶ οἷος κεκτῆσθαι μᾶλλον τὰ καλὰ καὶ ἄκαρπα τῶν καρπίμων καὶ ὠφελίμων.*）。何故なら、その方が自足している人には一

層相応しいから（*αὐτάρκους γὰρ μᾶλλον*）。[29]」

アリストテレスが、この高邁という言葉に重要な意味を担わせていた事は、以下の説明から明らかであろう。高邁な人[30]とは、ある意味で、完全な器量・徳を備えていた人ということになる。更に、その器量・完全な徳を備えていた人というのはどの様な人なのかというと、収益のある、利益のあるものを手に入れることに肉薄している、いわゆるエコノミック・アニマル的人間では決してなく、美の追求と利益に結び付かないようなものに肉薄している人である。

重要なことは、そのような人が、何よりも自足的な人にふさわしいとされているのである。自足的な人とは、何よりも有徳の人であって、加えて、その人の趣味というか関心が、美の追求と、利得に関わりのないものを追い求めているということである。このようにみてくると、〈高邁な人〉というのは、極めて興味深い人であると言えよう。

ところで、アリストテレスが問題にした〈神〉そのものについて、又〈国家〉それ自身の詳しい検討は他日を期すとして、とにかくこの「自足性」という言葉は、後のヘレニズム期哲学の一つのキーワードとして強く轟いていた事は、間違いない。[31]

結び

一　E.N.とPol.とが、実践学という学問領域に共に属するにも関わらず、プラトンとは違って、別々の作品に書かれていた。この両作品を継ぐキーワードとして働くのが、自足性という言葉である。自足性という言葉で、幸福と国家とが捉えられる。

二　自足性として考えられる場面は三つ考えられる。

a　幸福の場面において、それが「観想する」という活動として捉えられる。その活動が何にもまして、自足的だと考えられる・・・神的自足性

b　生成の終極という場面において、国家が自然と捉えられその国家が自足的である・・・自然的自足性

c　人間が人間として生きていく場面において、自分自身を知り、共に生きていくことが自足している者にさえ、必ず必要とされる。加えて、美しいものの追求と、利益に結び付かないものに肉薄している有徳な人、つまりは、高邁な人こそが自足的な人である・・・人間的自足性

本文中引用した訳文は、以下による。

アリストテレス全集、第13巻『ニコマコス倫理学』加藤信朗訳、岩波書店、1973.

アリストテレス全集、第16巻『弁論術』山本光雄訳、岩波書店、1977.

プラトン、『国家』藤沢令夫訳、岩波文庫、1979.

世界の名著、第6巻、アリストテレス『政治学』田中美知太郎訳、中央公論社、1979.

アリストテレス全集、第14巻『大道徳学』茂手木元蔵訳、岩波書店、1977.

注

(1)　最近の研究論文としては次のようなものが上げられる。R.Heinaman, 'Eudaimonia and Self-sufficiency in the Nicomachean Ethics', *Phronesis*,33-1(1988)p. 31-53. A.W.H.Adkins, '"Friendship" and "Self-sufficiency" in Homer and Aristotle', *Classical Quarterly*, N.S. 13 (1963)p. 30-45.

(2)　他にも重要な使い方をしているのは、Aristotle,『形而上学』1091b16-19、『天体論』279a16-22、『動物発生論』732a13-18等

が挙げられる。

(3) Aristotle, E.N. 1 ch.7 1097b14-15　この訳については、J.Burnet, *The Ethics of Aristotle*, Arno Press 1973 p. 33 参照。

(4) Aristotle, E.N. 1 ch.7　1097b8-11や、1169b18-19参照。この「ポリス的」(πολιτικόν)という言葉も要注意である。R.G.Mulgan, 'Aristotle's Doctrine that Man is a Political Animal', *Hermes* 102 (1974) p. 438-45 参照。

(5) T・アキナスは、一貫して、「自足性」を自体的な充足性 (per se sufficiens) と訳していて、「自足」の〈自〉・「自分の」という意味が入る余地を排除している。St.T. Aquinas, *In Decem Libros Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum Expositio*, Marietti, (1949) p. 28-31 参照。

(6) Aristotle, Rhet. 1360b15-28

(7) アリストテレスの自足性は、E.N.1で、最高善、すなわち、人間の善とは何かが問題とされ、この後続くエルゴン議論の前に、述べられたのである。そこでも、先ず、「終極性」(τέλειον) による、「目的」概念の三段階が区別され、そして、「最高善」の「自足性」が語られる仕方で登場し、しかも、かかる「自足的なるもの」は「幸福」だとされるのである。参考にすべきは、加藤信朗「καλόν, δίκαιον, ἀγαθόν (その一) ―アリステレスにおける超越価値の諸相―」都立大学『人文学報』106 p. 73-76 そして、エルゴン議論の取扱や、この論文作成に当たりとりわけ注目されるのは、森俊洋「「人間の善とは何であるか」の問いについて」九州大学哲学会編『哲学論文集』25 (1989) p. 83-100、また「目的」概念の三種類については、村田剛一「幸福（善）と徳との関わり」九州大学哲学会編『哲学論文集』24 (1988) p. 55-74 参照。

(8) Aristotle, E.N. 10 ch.7　1177a27-28

(9) Aristotle, E.N. 10 ch.7　1177b1-4

(10) Aristotle, E.N. 10 ch.7　1177b16-25

(11) Aristotle, E.N. 10 ch.7　1177b30-31

(12) 拙著「幸福について」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』25の1 (1992) p. 1-9。もとより観想活動は、アリストテレスが、独特の意味を込めて完全現実態と呼んだものであるが、もちろん活動とも、運動とも区別されるものとして、体系的運動論からの検討は、次回を期す。ただ、幸福とは一つの活動であり、運動との対比として厳密に考察されねばならない。なおそれについては、

藤沢令夫「現実活動態—アリストテレスにおけるキーネーシス（あるいは運動の原理）とエネルゲイア（あるいは活動の原理）との対置について—」『哲学研究』539, 540（1980）。そして、池田康男「アリストテレス：『自然学』第8巻と『形而上学』第12巻における神論について—運動とエネルゲイアの区別及び自足性概念との関連で—」『高知大学学術研究報告』39（1990）p. 173-192 参照。とても興味深い自足性概念の取扱がある。

(13) Plato, Res.8 ch.2 544d6-e1.

(14) Plato, Res.2 ch.10 368c7-. 5 ch.1 449a1-5. 8 ch.1 543c9-544a2. 更に、Plato, Apologia Socrates 36c5-d1.「自分自身に気をつけて、できるだけ優れた善いものとなり、思慮あるものとなるように勤め、自分にとってはただ付属物となるだけのものを、決して自分自身に優先して気遣うような事をしてはならないし、また国家社会の事も、それに付属するだけのものを、そのもの自体よりもさきにする事なく、そのほかの事も、これと同じ仕方で、気遣うようにと、説得する事を試みていたのです。」この表現の中にもハッキリと、人間個人の心の問題と、国家についての問題が基本的に相関し、類比的に語ることが許されるのを読み取ることが出来る。

(15) Aristotle, Pol. 1 ch.2 1252b27-1253a3

(16) Aristotle, Pol. 7 1326b2-5において、「同様に、国も余りに少人数から出来ていたものでは自足的ではないだろう（然るに国は自足的である）。また余りに多人数から出来ていたのでは、民族のように、生活に必要なものは自足的であろうけれど、国政を持つのが容易でないから、国ではないだろう」と語り、Aristotle, Pol. 1326b22 においては、「生活の自足を目標に（**πρὸς αὐτάρκειαν ζωῆς**）、一目で見渡しうる（**εὐσύνοπτος**）数の範囲内で出来るだけ膨張した人口」と述べている。

(17) Plato, Gorgias 482e-484a、488d489b、491e-492c等、参照のこと。

(18) アリストテレスは、国家が自然であるという論証をするに当たって、この2章で、自然（**ἡ φύσις**）という言葉や、それの関連語を、計23回用いているのである。その中で、自然において（**φύσει**）という表現が、13回と頻発し、自然（**ἡ φύσις**）は、5回。自然に即して（**κατὰ φύσιν**）は、2回。他は、自然の故に（**διὰ φύσιν**）（**φυόμενα**）（**φύεται**）（**φυσικόν**）等である。アリストテレスは、自然という言葉を頻発しながら、国家が自然であることを、その起源に遡って論証して見せてくれているのである。

(19) Aristotle, Pol. 1261b11-12 では、「家は一人の人間より自足的であり、国は家よりもより自足的である。」と語られる。

(20) Aristotle, Pol. 1253a9

(21) この点については、拙著「アリストテレスの友愛（Philia）論」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』24の1(1991)p.1-8 において、詳述した。

(22) ここからは、『大道徳学』(Magna Moralia 以下→M.M.と書く)からの引用であるが、殆ど同様の趣旨の主張が、他の倫理学書にも見られる。E.N. 9 ch.9 1169b3-1170b19 と、『エウデモス倫理学』(Ethica Eudemia 以下→ E.E.と書く)7 ch.12 1244b1-1246a25 である。論点、内容は、殆ど変わらないのであるが、E.N.では、「幸福な人は友を必要とするか否か」という論点から始まり、考察されている。それに対して、E.E.では、「自足と親愛についても、両者相互の間に存する関係がどのようなものであるか」というところから、考察が進められている。しかし、論点は全く同じと考えてよい。

(23) Aristotle, M.M. 2 ch.15 1212b24-32

(24) Aristotle, M.M. 2 ch.15 1212b38-1213a1

(25) Aristotle, M.M. 2 ch.15 1213a8-15

(26) Aristotle, M.M. 2 ch.15 1213a21-26

(27) Aristotle, M.M. 2 ch.15 1213a29-b2

(28) Aristotle, E.N. 4 ch.3 1124a1-4

(29) Aristotle, E.N. 4 ch.3 1125a11-13

(30) アリストテレス全集、第13巻『ニコマコス倫理学』加藤信朗訳、岩波書店、1973, p. 395 によれば、字義は、「大きな心」日常語としては、「寛容」「仁慈」「勇猛心」「堪忍」等を意味し、『分析論後書』では、「甘受しないこと」と「幸運と不運にあって平然としていること」の二義が確認されている。

(31) 山本光雄、戸塚七郎訳編、『後期ギリシア哲学者資料集』岩波書店、1988. p. 65。エピクロスの項参照。

（昭和五十六年本学大学院博士課程中退・鈴鹿工業高等専門学校助教授）